

## 書評

武田宙也

## 『フーコーの美学——生と芸術のあいだで』

人文書院、2014年

島村幸忠

本書『フーコーの美学』は、2012年に京都大学に提出された博士論文をもとに書かれた、著者武田宙也にとっての初の単著である<sup>1</sup>。同書では、20世紀フランスの大哲学者ミシェル・フーコー（1926-1984）の芸術論を中心に議論を展開し、そうすることで彼の思想全体を再解釈するという、野心的な試みが行われている。この試みには、フーコー研究のある大きな課題が関わっていると思われる。それについては、リチャード・シュスターマンがいみじくも以下のように述べていることから理解されるだろう。

多くの学者は、この初期の研究のもつ豊かな政治的意義に心酔していたので、フーコーが後に自己－配慮の倫理学へと転回したときに失望した。美的な自己－スタイルと型破りな性の快楽を賞揚することで、フーコーの哲学は、大規模な社会制度という壮大な壁画、あるいは学問的な知という個人を超えた形式から、私的な領域へと縮減され、軽薄なナルシズムの機嫌を伺っているかのように思われた。それでもなお、初期のフーコーと後期のフーコーの二者択一を拒否する者でさえ、その異なる哲学を結びつけて、なんとか首尾一貫した一枚の絵にするにはどうすればよいのかという問題に直面することとなった<sup>2</sup>。

『フーコーの美学』は、ここで語られている問題を引き受け、それに答えを与えようとするものと言えるだろう。すなわち、初期と後期の表面上の断絶を埋め

1 著者には、すでに共著として『まぶさび』（七月堂、2011）や『現代社会学事典』（弘文堂、2012）、また共訳書としてロベルト・エスポジト、岡田温司監訳『三人称の哲学生の政治と非人称の思想』（講談社、2011年）などがある。

2 リチャード・シュスターマン「生の技術としての哲学」要真理子／古後奈緒子／立野良介訳『美と芸術のシュンボシオン』勁草書房、2002年、323頁。

合わせ、そのあいだに通底する問題系を描き出すこと<sup>3</sup>、それこそが同書の課題なのだ。

そこで著者が注目するのがフーコーによる芸術論である。ここにこそ『フーコーの美学』の研究の独創性がある。必要なことは、フーコーの哲学と芸術論の双方に十分に目を配りつつ、両者を照らし合わせ、その関係を明確に打ち立てることだ<sup>4</sup>。そのために、著者は前期フーコーの芸術論のみならず、後期の「生存の美学」を積極的に評価し考察している<sup>5</sup>。また「生存の美学」については、先にもあげたシュスターマンや、同書でも言及されているマリオ・ペルニオーラによって注目されてきた。しかし、彼らがセクシュアリティの問題に結びつけて考察してきたのに対し、著者は「生存の美学」を性の問題のみに結びつけることはせず、より広範な問題として捉えようとする。つまり、「生存の美学」は、まさに「生」そのもの、あるいは私たちのあり方それ自体に結びつく問題であるとするのである。その上、それは現在でも盛んに論じられている「生政治」を中心とした権力の問題と密接な関係にあるとされる。なぜなら、フーコーは「生存の美学」を介することで、「生政治」における主体のあり方の構想を説いているからである。以下で、その一端を紹介しよう。

## 外の芸術論

前期フーコーの芸術論から見ていこう。フーコーの芸術論を扱う上で重要なのは「外」という概念である。この概念が初めて登場したのは、1966年に書かれたブランショ論「外の思考」においてだ。ここでいう「外」とは、端的に言えば「さまざまな仕方で主体を限界へともたらし、ついには消滅させてしまうような、非人称的な力のようなもの」(40頁)のことである。フーコーは古典主義時代から近代への転換期及び、それ以後に作られた様々な文学や絵画のなかに、そのよ

3 通常フーコーの仕事は前期(1960年代の考古学の時代)、中期(1970年代の系譜学の時代)、後期(1980年代の倫理学の時代)に分けられるが、著者は芸術論を軸に前期(1950年代から1970年代まで)と後期(1970年代以降)に分けている。

4 著者も指摘しているが、これまでフーコーの芸術論に関する研究は多くなされてきた。しかし、芸術学の観点からは、その思想を十分に考慮することができず、他方で、思想研究の側からみても、その美学的な側面がなおざりにされてきたのである。

5 「生存の美学」の重要性を説くものうち日本語で読めるものには、例えば、ヨハンナ・オクサラの『フーコーをどう読むか』関修訳(新泉社、2011年)がある。しかし、そこではいまだ議論が十分になされているとは言い難い。また、著者も指摘している通り、「生存の美学」は、例えばダンディズムやサルトルの実存論に類するものとして批判されることもあった。それゆえに、これまで議論の中心に置かれることが少なかった。

うな「外」の要素を見いだす。それゆえ、その作品が扱われた芸術論を、著者は「外の芸術論」と呼んでいる。具体的な作品例を列挙すれば以下の通りである。まずは文学論。サドのエロティシズムは主体を否認するにいたる高揚のうちに起こり、ピエール・クロソウスキーの作品に登場する人物はシュミュラークルによって匿名化され、バタイユのエロティシズムにおいては語る主体の言葉の中に主体を持たない言葉が見いだされる。また、レーモン・ルーセルにおいては匿名的な言説が反復される（『レーモン・ルーセル』、1963年）。次に絵画論。ペラスケスにおいては、モデル、鑑賞者、画家を同時に表象しようという不可能性に起因した「本質的な空虚」が、マネにおいては描かれるものの外部のものとしてキャンバスの物質性が、マグリットにおいてはオリジナルを持たないイメージとしての「外の空間」が表現されている。以上のうちに確認される主体の匿名化、あるいは三人称化は、主体の存立を揺るがすものである。ここで示されていることが、フーコーの歴史哲学のテーゼ、例えば「言表に出来事としての単独性を取りもどすこと」あるいは「歴史の出来事の偶然性を明示すること」などに対応していることは明らかであろう。

ところで、これまで「外」という概念は前期の芸術論に登場するのみで、その後は忘れ去られたものだと考えられてきた。しかしながら著者によれば、後期の芸術論にもその思考はいまだ根付いているという（この点で著者はドゥルーズのフーコー論を踏襲しているといえる）。「外の美学」といわれる後期フーコーの芸術論を跡づけることで、自然とそのことは明らかとなるだろう。

## 外の美学

フーコーにおいては、主体の匿名性は権力のあり方とも深く関わる。というのも、権力とは力の諸関係であり、「権力の諸関係は、「意図的」であると同時に「非主体的」」（117頁）でもあるからだ。権力それ自体に善悪はないが、それが固定化されることで悪しき状態、すなわち支配状態にいたる。このことが『監獄の誕生』から『知への意志』へといたる70年代の権力論において確認された。それゆえ、権力は常に変動させられる必要があるのだ。そこで後に、権力の固定化に抗しよう手段として「自己による自己への働きかけ」が引き合いに出されるだろう。フーコーが参照するのは、古代ギリシアの「生存の技法」であり、「生存の美学」である。そこでは自己を芸術作品に見立てて、あるいは実際の作品として変形させていくことが要請されている。最も重要かつインプレッシブなフーコーの言を引こう。

私が驚くのは、われわれの社会では、芸術がもはやものとししか関係を持たず、

さまざまな個人や生と関係を持っていないということであり、また、芸術がひとつの専門化された領域、つまり芸術家という専門家たちの領域となっているということです。しかし、あらゆる個人の生が芸術作品になりえないでしょうか。なぜタブローや家は芸術作品であるのに、われわれの生は違うのでしょうか。<sup>6</sup>

作品としての生の変容は真理への到達を目的としてなされる。すなわち、自己と真理との関係性のうちになされる実践なのである。ところで、そのような行為は、日常の行為及び、実際の芸術作品それ自体の製作行為のなかにも見いだされる。そこで、フーコーは「書くこと」の重要性を強調している。「書くこと」は書物を書くことであり、また自己を書き換えることだからである。そのような生の変容を、フーコーはルーセルのなかに見いだす。ルーセルは「書くこと」によって存在様態の修正を、生涯を通じて追いかけていたというのだ。ところで、すでに「外の芸術論」においても確認した通り、「書くこと」はその主体が匿名化され、非人称化されるということであった。すなわち、「他なる生存のあり方」への変容は主体の非人称化でもあるのだ（これは「外の主体化」といわれる）。「外」は内側に織り込まれるようにして内側に「外」を形成しているのである（当然、襞＝折り目がイメージされている）。かくして、「生存の美学」は「外の美学」と呼ばれることになる。「自己の形成」に、つねにすでに「他なるもの」が織り込まれることによって、内在化のプロセスは、同時に外在化のプロセスへと通じることになる」（242頁）からだ。

以上でみてきたように、前期フーコーにおいても、また後期フーコーにおいても「外」という概念は非常に重要なものである。著者によれば、フーコーは「「他なる生存のあり方」の追求を、生涯にわたる哲学的な課題とした」（277頁）のだが、それを可能とする条件がまさに「外」なのであろう。そのことを著者は、フーコーが扱った多くの芸術家、あるいはそれらの芸術論とその都度向き合うことで確認しているのだ。ここではその全てを取り上げることはできなかったが、「外の芸術論」で登場した芸術家以外にも、「外の美学」で言及されている芸術家（ピカソ、ポール・ルベロル、コンスタンティン・ビザンティオス、フロマンジェなど）たちへも注目されたい。その意味で、本書は「生」をめぐる今日の思想界の動向のみならず、芸術に関心をもつ人々をも楽しませてくれる内容になっている。

6 フーコー「倫理の系譜学について」武田訳、189頁。